

知求会ニュース

2017年6月

第62号

◎ 博士前期課程、入学おめでとうございます！

2017年4月7日(金曜日)午後3時から国際学部大会議室にて、2017年度オリエンテーションが開催されました。学長からの新入生へのメッセージは宇都宮大学 HP (アドレスは以下参照)に、掲載されています。

(<http://www.utsunomiya-u.ac.jp/important/2017/04/004854.php>)

今年度の入学者は、国際社会研究専攻の第19期生 王 志博さん、韓 ビジさん、香 梅さん、陳 昊さん、劉 欣さんの5名と国際文化研究専攻の第19期生 阿久津由加里さん、江口堯博さん、王 春宇さん、魏 毓儒さん、高 天戈さん、趙 煒さん、唐 安琪さん、TON NU THANH TU さんの8名、そして、国際交流研究専攻の第14期生于 遠さん、大橋秀一さん、曲 泓凝さん、孔 媛媛さん、清水友美さん、石 文君さん、TAMANG RAJ KUMARI さん、張 盼盼さん、鄭 欣さん、白 夢然さん、BUI THI MINH NGUYET さんの11名で、計24名でした。

◎ 博士後期課程、入学おめでとうございます！

今春宇都宮大学大学院 国際学研究科博士後期課程国際学専攻に入学した今野 善伸さん(国際文化研究専攻・第17期生)、鈴木 大史さん(国際社会研究専攻・第17期生)、そして、梁 鎮輝さん(国際文化研究専攻・第17期生)進学おめでとうございます。今後の研究成果に期待したいと思います。(博士録43を参照)

◎ 博士課程後期、進学おめでとうございます！

今春修了された RONY JOSE VARGAS VILLALOBOS さん(国際交流研究専攻・第12期生)が広島大学大学院 国際協力研究科博士課程後期に進学されました。今後の研究成果に期待したいと思います。

◎ 着任教職員紹介その21

飯塚明子助教

留学生・国際交流センター所属の飯塚先生が、4月1日付で着任されました。

- ① 氏名(英文表記): 飯塚 明子 (IIZUKA Akiko)
- ② 専門: 国際開発学、コミュニティ防災、コミュニティ開発学、国際 NGO 学
- ③ 前職: 防災専門 NGO のスリランカ事務所所長
- ④ 趣味: ヨガ、ワイン、育児、料理、旅行
- ⑤ 自己紹介: 初めまして、飯塚明子と申します。兵庫県出身で宇都宮に住むのは今回が初めてです。これまで留学(米国、オランダ)や仕事(インド、ベトナム、スリランカ)

で15年程海外に住んでいました。今回宇都宮大学で働くご縁に恵まれ、久々に日本に帰国し、4月に宇都宮大学留学生・国際交流センターに着任いたしました。大学やセンターの業務はもちろん、これまでの現場での実践経験を研究や教育で生かしつつ、これまでとても中途半端に感じていた研究や教育についても深めていけたらと思っております。よろしくお願いいたします。

(2017年5月9日原稿受理)

◎ 掲載記事紹介

1. 宇都宮大学女性研究者キャリア支援室が発行する『先輩たちからのメッセージ ロールモデル集Ⅱ』6-9面に、「女子大学院生 インタビュー ～研究者の道に進んだ理由～」の内容で、[佐藤あかね](#)さん、[森 千鶴](#)さん、[張婷婷](#)(国際学研究科博士後期課程国際学研究専攻8期生)さんらの記事が掲載されました。
2. 宇都宮大学女性研究者キャリア支援室が発行する『先輩たちからのメッセージ ロールモデル集Ⅱ』14-15面に、「子育ては期間限定、子育ては幸せ時間」の内容で、[高橋若菜](#)先生の記事が掲載されました。
3. 宇都宮大学女性研究者キャリア支援室が発行する『先輩たちからのメッセージ ロールモデル集Ⅱ』20-21面に、「“なぜ?”の気持ちを大切に!」の内容で、[大野斉子](#)先生の記事が掲載されました。
4. 宇都宮大学女性研究者キャリア支援室が発行する『先輩たちからのメッセージ ロールモデル集Ⅱ』24-25面に、「働く」ということは・・・」の内容で、[松金公正](#)先生の記事が掲載されました。

◎ 国際学部だより

1. UUnow 第42号(平成28年4月20日発行)4-5面に、「特集 国際学部の新しい幕開け グローバルな実践力の育成に向けて 学科再編・統合が目指すもの」と題して、前学部長・[田巻松雄](#)先生と新学部長・[佐々木一隆](#)先生の記事が掲載されました。
2. 宇都宮商工会議所が発行する会報『天地人』(平成29年5月10日発行)5-6面に、「特集 多文化対応と地域活性化 インバウンド観光への対応が、地域発展のキーワード」の「特集02 多文化対応が地域活性化につながる「宇都宮大学ハラール研究会」と題して、「多文化対応の代名詞ともなりつつある、イスラム教徒へのハラール対応。そこに取り組むことで、地域活性化へつながるポイントが見えてきます。」の内容で[友松篤信](#)先生の記事が掲載されました。

○刊行案内

1. 国際学部と国際学部附属多文化公共圏センターより3月下旬に、多文化公共圏センター年報第8号135頁が刊行されました。目次を以下に記します。(敬称略)

はじめに

重田康博

特集 座談会「生まれ変わる国際学部」

田巻松雄

(対談者＝バーバラ・モリソン、スエヨシ・アナ、高橋若菜、松村史紀、田口卓臣)

I 論文・報告等

「Nostalgia as a source of strength and driving force

among young Peruvian returnees from Japan」

スエヨシ アナ

「東京福島第一原子力発電所事故（2011）が浮き彫りにした

避難者の実像と国民意識との乖離

ー栃木避難者母の会代表・大山香とその家族を手掛かりとしてー」

大山 香

「Japanese language plays an important role in the development of Cambodia」

サ ソチア

「日本語とキルギス語の従属節のテンス・アスペクトに関する考察」

スバゴジョエリ アセリ

「地域社会の異文化交流拡充を目的とした、

視聴覚メディアの活用と情報発信に関する研究

ー玉村町国際交流協会の地域日本語教室での実践例ー」

竹上瑞穂

「台湾における外国人家事・介護労働者の課題

～労働者の失踪と労働環境への一考察～」

鄭 安君

II 活動報告

- 1 第8回グローバル教育セミナー「難民問題とグローバル教育」
- 2 <シンポジウム>国際交流都市日光の再発見
- 3 <宇都宮大学生国際連携シンポジウム 2016>「越境する」生き方
- 4 益子プロジェクトの「益子の魅力再発見ツアー ～陶芸体験をしよう～」
- 5 「福島原発震災に関する研究フォーラム」本年度の活動報告
- 6 FnnnP 栃木 Jr.活動報告
- 7 HANDS プロジェクト部門活動報告
- 8 ニュースレター『HANDS next』第22号
- 9 フェアトレードまつりチラシ

III 関連資料

- 1 センター組織と活動記録
- 2 宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター年報発行要綱

2. 「将来の『下層』か『グローバル人材』かー外国人児童生徒の進路保証実現を目指して」研究チーム（研究代表 田巻松雄先生）から『岐路に立つ日本と世界 2016』が3月下旬に刊行されました。

3. 多文化公共圏センターより第8回グローバル教育セミナー報告書『難民問題とグロー

バル教育』が3月下旬に刊行されました。

4. 多文化公共圏センターより『「国際交流都市日光の再発見！ ―学生が考える日光のもう一つの地域発展プラン―」シンポジウム報告書』が3月下旬に刊行されました。

5. 宇都宮大学国際学部研究論集第43号179-195頁に**タンティミビン**さんの投稿論文「ベトナム人居住集中地域における小規模ベトナム語教室の学習・指導について ―在日ベトナム人の子どものバイリンガル教育を育てるために―」が掲載されました。

◎ 第四回重田ゼミ研究会が5月14日（日曜日）午後1時30分から4時30分まで、UUプラザにて開催されました。報告者は以下の通りです。

1. **李 園**（国際交流研究専攻12期生）

「日本の貧困問題に対するNPO活動の可能性と限界について―フードバンクを事例に―」

2. **閔 涵**

「プラン・インターナショナル・ジャパンでボランティア活動についてのレポート」

3. **趙 俊**（国際交流研究専攻11期生） 「IT業とNPOの関係」

4. **青木健資** 「連合の成り立ちと政治への影響」

5. **重田康博**先生 「激動するグローバル市民社会―慈善から公正への発展と展開」

6. **小林ひとみ**（国際交流研究専攻9期生）

「ネパール移動労働者のHIV感染に関する一考察 ―トラック運転手および助手への意識調査を通して―」

◎ 宇都宮大学公開講座（地域連携教育研究センター主催）有料

1. **韓国語講座**

丁 貴連先生(コーディネーター)

①初心者のための韓国語入門コース

金 多希(国際文化研究専攻・第8期生)

―はじめての韓国語―

②韓国語初級コース ―楽しい韓国語―

金 多希(国際文化研究専攻・第8期生)

③韓国語中級コース ―もっと話せる韓国語―

金 多希(国際文化研究専攻・第8期生)

―はじめての韓国語―

2. **中国語初級コース**

松金公正先生(コーディネーター)

胡 哈斯其木格

(国際文化研究専攻・第13期生)

3. **芥川龍之介と菊池寛** ―漱石の弟子たち―

小池清治国際学部名誉教授

作新学院大学客員教授

4. **第四次産業革命とグリム兄弟**

橋本 孝国際学部名誉教授

―グリム兄弟を通して現代を考える―

5. 「本当の自分」とは何か

神長善次元国際学部客員教授

－「自分」の本性と健康の原点を考える－

6. 里山で楽しむランブリング

平井雅世(コーディネーター)

(国際社会研究専攻・第4期生)

◎ 宇都宮市民大学（前期）門講座（宇都宮市民大学事務局主催）有料

1. 世界を見る、世界が見る、宇都宮

松金公正先生他

5月30日～7月11日の火曜日、午後2時～4時。全7回、定員50人。

研究室訪問 47 第9号から国際学研究科に関係する内外の先生方に寄稿をお願いしたコーナーを設けました。第47号は地球社会形成研究講座所属の佐々木史郎先生にお願いしました。

「東北アジア論」の授業をふりかえって

佐々木 史郎

平成29（2017）年3月末をもって、宇都宮大学を定年退職しました。平成5（1993）年7月1日に旧教養部に着任し、翌年10月、国際学部の開設とともに、その専任となりましたから、この学部ですごしたのは計22年半ということになります。大学院国際学研究科は平成11年4月から18年間の勤務でした。

本来なら、3月末で研究室と資料室を引き払わなければならなかったのですが、6月も半ば近くになった今も、まだ居座っています。現役最後の1年間は課題山積で、部屋の片付けどころではなく、そのまま退職の日を迎えてしまいました。さいわい学部のご厚意で、しばらくの猶予を認めていただいたので、あまり遅くならないよう、撤収の作業を進めているところです。

先日、使い残しの授業資料を束ねていたら、学部科目の「東北アジア論」で使用していた基礎知識確認用のクイズが出てきました。これは、東北アジアの地理編・歴史編あわせて30の小文をあげ、それぞれ下線部の正誤を問うというものです。初回か2回目の授業でこれを用いて、とかく誤認されがちな事柄に注意を喚起し、あとの授業で少し詳しく解説するようにしていました。ここにいくつか抜き出してみます。

- (a) 中国は日本海に面した港湾の数がロシアよりも多い。
- (b) 大韓民国と朝鮮民主主義人民共和国は現在、北緯38度線を国境としている。
- (c) 1910年の日韓併合後、初代の朝鮮総督になったのは伊藤博文である。

正解は3つとも×なのですが、例年、どれにも○と答える学生の比率がかなり高かったものです。

まず(a)は、漠然と「中国は日本海に面した国」と思い込んでいるふしがあるので、

「日本海」の範囲をきちんと再確認させるための設問です。中国は、北朝鮮との国境を流れる図們江（朝鮮名：豆満江）の下流で最も日本海に接近しますが、この川の河口部はロシアと北朝鮮の接境区間となっており、中国は、あとわずかのところで日本海への出口をふさがれる形になっています。国連開発計画（UNDP）による図們江下流域の共同開発構想が目立った進展をみせていない中、中国が北朝鮮北東部の羅津港の使用権を重視している背景に、そうした位置関係があるということも、授業でふれてきました。

次の（b）は、日本のメディアが現在でもしばしばこういう言い方をするので、誤認する人が多くてもしかたがないのですが、現在の境界は北緯 38 度線ではありません。この線が実質的な境界としての意味をもっていたのは、1945 年の米ソ両軍による分割進駐から 1950 年 6 月の朝鮮戦争勃発までの 5 年弱の期間であり、1953 年 7 月の停戦以降は、この 38 度線と東上がりで交差する軍事分界線（休戦ライン）が南北を分けています。この 2 本の線の交点から東側では、当初北朝鮮に属していて、停戦後は韓国側に入った地域があり、西側ではその反対に、韓国領から北朝鮮領に変わった地域があるということです。韓国では、現在の分界線を「38 度線」とはよんでいません。日本でこの言葉が多用されるのは、南北分断の象徴的な用語として定着している面がありますが、やはり認識不足も大きいと思います。あるいは、この言葉を使うことで、なんとなく専門用語に通じているような気分になるからかもしれません。ただ、テレビのレポーターが韓国東部の江原道を訪れ、道路脇にある北緯 38 度の標識をさして、「えっ、38 度線って越えられるんですねえ！」と叫んだりする場面に出くわすと、もう少しなんとかならないものかと思ってしまいます。

なお、現在、南北両国を分けているのは「国境」ではなく、あくまでも「休戦ライン」という暫定境界ないし不確定境界ですし、さらに、韓国はこの休戦協定に調印した当事国ではないので、問題はさらに複雑です。しかし、ここを曖昧にして理解を誤らせるわけにはいかないので、しつこく説明してきました。それでも、授業の後で「南北両国が北緯 38 度線で分断されていることがよくわかった」などというコメントを書いてくる学生がいたりして、脱力感を覚えたことも一再にとどまりません。

（c）は、以前、名の通った出版社の本で、これに類した記述に接したことがあるので、授業では必ず取り上げるようにしていました。その本にあったのは、たしか、次のような文だったと記憶しています。「日本は 1910 年に韓国を併合し、朝鮮統監府を置いて植民地支配を行った。初代統監は伊藤博文である。」（下線は筆者）

この文の誤りは、日本が大韓帝国政府に強要した 1905 年の乙巳保護条約（日韓保護条約）に伴う韓国統監府設置と、1910 年の韓国併合による朝鮮総督府設置とがゴッチャになっている点にあります。伊藤博文は初代の韓国統監ではありますが、併合前年の 1909 年に韓国の独立運動家・安重根によって射殺されているので、1910 年の併合には直接立ち会っていません。一般には、第三代韓国統監から初代の朝鮮総督となった寺内正毅よりも、伊藤博文の方がはるかに知名度が高いので、伊藤の名を出したほうが読者にアピールすると思ったのかもしれませんが、だからといって、史実を曲げてしまってはいけません。この本だ

けでなく、伊藤を初代朝鮮総督としている記事は、かなり方々で見かけます。

ところで、この本で私が首をかしげたのは、この記事の後に、「私たちは正しい歴史を学んでいかなければならない」という文があったからです。ここだけでなく、この出版社はいろいろな書物で、「正しい歴史を」と訴えています。端的には、「かつて日本が犯した侵略行為を直視せよ」という趣旨です。私自身は歴史研究者ではなく、歴史教育に携わったわけでもありませんが、長く韓国とふれあってきた者として、この主張には、まったく異存がありません。しかし、この出版社に限らず、こういう主張をしている社の本の中で、しばしばずさんな事実誤認を見てきたので、ともすれば胡散臭さや不誠実さを感じてしまうのです。たとえば、出典の控えがなくて、うろ覚えですが、「日本は韓国を併合すると、朝鮮語を禁止し、日本語専用を強制した」とか「1923年の関東大震災では、徴用で連行されてきた朝鮮人が多数虐殺された」といった記述を目にした記憶があります。「東北アジア論」の受講生諸君の間にも、こうした認識は少なからず存在していました。しかし、これらは、歴史記述としては正確さを欠いたものといわざるをえません。

前者についていえば、朝鮮総督府が朝鮮教育令を公布して普通教育を推し進める中で、公教育での教授言語を日本語としたのは事実ですし、1940年代に入って戦局が悪化し、皇民化教育の強化が叫ばれるようになると、朝鮮語の使用が著しく圧迫されていったのも事実です。しかし、朝鮮総督府はその一方で、朝鮮語常用者の存在を前提として学校を設置し、ハングル・漢字混用の朝鮮語教育を必修として、朝鮮語教科書を編纂したりしています。これは朝鮮の民族文化の尊重などといった次元ではなく、植民地統治の効率上、教育内容の統制は強めつつ、まずは識字率を高めるという要請に従った当然の施策の一つです。現在の韓国で80歳以上の世代には、朝鮮総督府の教科書でハングルを習った方が多いはずですが、日本の国策に沿った翼賛的な内容が中心とはいえ、朝鮮語による出版や映画制作、レコード製作などは1940年代まで行われていて、今日、その復刻版を多数目にする事ができます。

後者については、朝鮮への国民徴用令の適用（1944年）だけでなく、その前段階としての朝鮮総督府労務協会による労務者斡旋募集事業（いわゆる官斡旋、1943年）や民間業者による労務者集団募集開始（1939年）を視野に入れても、関東大震災とは時期的にかなりのずれがあります。震災当時、日本にいた朝鮮半島出身者のうち、京浜地区の工場や土木建築現場で低賃金・長時間労働で酷使されていた人は多数にのぼるでしょうが、そのこと自体は徴用や強制連行と結びつきません。また、1919年の三・一独立運動後の抗日活動の高まりに警戒を強めていた日本としては、半島からの渡航に厳しい目を向ける時期が続いていたということにも留意しておきたいところです。

こうした不正確な認識は、高句麗・百濟・新羅の「三国時代」と馬韓・弁韓・辰韓の「三韓時代」を取り違えるなどのレベルとは違った重みをもつように思います。もともと日韓の近現代史などに関心のない人なら、誤認も何も起こりようがないのかもしれませんが、むしろ関心が強く、ぜひこのことを訴えていかねばと思う人の中で、不確かな思い込みやイ

メッセージが、まともな検証をへずに一人歩きするようになるのが不安なのです。

東北アジアのことを扱っていると、どうしても近現代の日韓関係をよけて通るわけにはいかないで、授業では、ある程度の回数を関連の内容に充ててきました。その際に心がけようとしたのは、自ら思い込みの不確かさに気づいて、実証研究の大切さに思いをいたす機会を提供するということでした。しかし、長年の授業を振り返ってみると、私自身がそうした不勉強による思い込みから自由ではなかったことを痛感します。実際、気分の高ぶりを覚えながら学生諸君に語った中に、そうした誤りが何度かありました。そして、まさにその高揚感こそが要注意だったと思います。「良心的」な自分に酔っているような教員を見て、偽善の気配を感じ取った学生も少なからずいたことでしょう。他方、そういう高揚感が伝染して、誤った思い込みをそのまま受け入れてしまった学生がいたかもしれません。ただ、今になってそのことを反省しても、それを生かして次の授業を修正していく機会がもうないのだという事実思い至り、あらためて「退職」という二文字をかみしめている次第です。

最後に、日韓の歴史に関連して、37年前の韓国留学中にたいへんお世話になったある先生のお話をここに書き留めておきたいと思います。「東北アジア論」の授業では1～2度紹介したことがあります、文章にするのは、これが初めてです。

先生は1930年代のお生まれで、植民地時代の教育を受けておられましたから、日本語はご堪能で、私に話してくださる時もしばしば日本語がまじりました。なんか食事やお酒をごちそうになりましたが、お酒が回ってくると、日本統治時代の思い出話がよく出ました。日本人の女性の先生がやさしくて、いろいろな歌を教えてくれたこと、駅前の食堂で食べた日本式のうどんがおいしかったこと、街の賑わいで心が躍ったことなど、楽しかったお話が中心でした。私を気遣って、日本に関する嫌な思い出は避けられたのかもしれない。

その先生があるとき、「佐々木さん、私は日本が好きなんですよ！」としばらくだすような口調で切り出されたことがあります。瞬間どう受け止めていいのかわからなかったところ、すぐに続けて、次のようなお話がありました。

「でもねえ。私も解放後の韓国で生きてきて、韓国の教育も受けてきて、あの時代が自分の国にとってどういう時代だったか、今ではよくわかっている。だから、子供のころのことを思い出して、楽しい気持ちにひたろうとする自分を、つい自分で押さえ込んでしまうことがある。あのころのことを純粋に楽しかった時代として思い出してはいけないという気持ちが、心のどこかにあって、時々それがすごく苦しくなるんですよ。こういう話はうちの子供にも、学生たちにも通じないだろうと思って、話したこともない。佐々木さんは韓国のことを勉強しに来てくれた日本人だから、ちょっと話ししてみたんだけど、それでもやっぱりわかりにくいでしょうねえ。」

このあと、すぐに先生は話題を変えられ、再びこのお話に戻ってくることはありませんでしたが、この時のことは強く心に残っています。実は、これとよく似た話が田中明の

『ソウル実感録』(北洋社、1975年)に書かれていますので、あの時代を生きた人々の中で、こういう思いを抱く人は多かったものと思われます。もちろん、私にこの痛みが正しく理解できたわけではありませんが、「歴史を奪われる」(先生ご自身はこういう言い方はなされませんでした)ということは、こういうことなのかということが、今になって、少しわかってきたような気がします。いつか機会があれば、このことを自分の言葉で語れるようになりたいと思っています。

とりとめのない長話におつきあいくださって、ありがとうございました。

(2017年6月12日原稿受理)

博士録 42 第22号から今後の博士誕生を鑑み、新コーナーを設けました。第42回目には松金研究室OGの張婷婷さんをお願いしました。

「中国における俳句の受容と展開に関する研究 —1920年代周作人による俳句の翻訳と小詩運動を中心に—

張 婷婷

1. 博士論文の概要

本論文は、20世紀初頭の中国における文学革命期に焦点をあて、周作人(1885-1967)による俳句の翻訳と小詩との関係性を明らかにすることを主たる目的とする。分析にあたっては、まず周作人がどのような課題をもって俳句の翻訳を行ったかを整理する。その上で、なぜ周作人が提起した「俳句的小詩」の創作という呼びかけに多くの知識人が呼応し、小詩が広まったのか、また、その後、なぜ小詩は急速に衰退したのか、という点を考察する。

以下、各章ごとに内容を略述する。

第1章では、周作人の文学活動において、俳句の翻訳が如何に重要な役割を担っていたかを明らかにするために、彼の論考「人の文学」を分析し、彼の文学観の一面を明らかにした。そこから、彼が、人間の平等を表現できる新文学を創作するために外国文学の翻訳を重視していたことがわかった。つまり、彼による翻訳とは、新文学を作り上げるために必要不可欠な所作であり、このような文脈で俳句の翻訳を考えていく必要があることを明らかにした。

第2章では、周作人は翻訳などにより入手したものを、どのような形で世に呈示していたのかについて考察するため、彼にとって新詩を作ることはどういう意味を持っていたのかを分析した。周作人の文学観と彼による新詩の創作との関係を明らかにした。その結果、新文学の提唱にあたって、胡適(1891-1962)らによって創作されていた新詩には詩法など欠点が多く、周作人は抒情性や社会との関わりという側面に着目し、新詩の改良に取り組んでいたことを、「人の文学」の要素を含む「雪搔きの二人」を例に示したことを明らかにした。

第 3 章では、周作人は外国文学を翻訳する際になぜ日本に注目したのかを明らかにするために、彼による小詩の構想と俳句の翻訳との関わりを検証した。その結果、彼が俳句の翻訳を行った主な理由として、当時の新詩の質の向上をはかるべく新しい詩の構想をもっていたこと、日本文学には独特な価値があるという日本文化観をもっていたこと、俳句こそが日本の国民性の長所を示す代表的な詩歌であると考えていたことが挙げられる。

第 4 章では、小詩運動の高まりと衰退の理由を考察した。当時小詩が大量に創作された主な理由として、文壇ではさらなる新詩法の探求が望まれていたこと、俳句は中国の古典詩との創作手法が通底するところがあって受け入れやすかったことが挙げられる。しかし、一方で、この小詩は短期間で衰退した。その主な原因は、口語で綴る散文体によって翻訳された小詩は、古典定型詩を好む人から反発を受けたことが挙げられる。つまり、ここに新文学の創出を外国文学の翻訳に頼る周作人の限界性をみることができる。

以上の考察から、周作人による俳句の翻訳には、新詩の質の向上のみならず、新文学の発展や中国の国民性の改造といったはっきりした目的意識があったことが分かった。周作人のこうした一連の文学活動は、まさしく彼の「人の文学」、「平民の文学」という文学観を実践した結果であった。つまり、周作人による俳句の翻訳の要諦は決して日本文化である俳句を中国に紹介するということにあるのではなく、如何に新文学の確立をはかり、中国の近代化に寄与するの点にあったのであり、そういう意味で彼による俳句の翻訳は中国の近代文学に「人の文学」という要素を扶植する過程において重要な役割を果たしたと言える。また、本研究では周作人が俳句という存在を常に中国文学の近代化との関連性の中で捉えようとしていたことが明らかとなり、周作人の日本文学との関わりという点において、新たな研究的視点を提示することができたと考える。

2. 後輩への助言

私が博士課程で痛感したことは、3 年間は非常に短い期間ということである。従って、より速く多く、作業をこなすことをお勧めする。自分の研究以外に割かなければならないこともあり、それらを考慮して研究計画、論文執筆計画、投稿論文、博士論文を検討する必要がある。研究では、指導教員や多くの先生方と付き合うことが大切である。博士課程に入学した時から、先生方、先輩方から研究計画を立て、着実に進めていくことが重要であると指導していただいたが、実際に自分の経験から考えてみると、思うように進められないことが多くあった。従って、研究計画は予定通りに進むことはまずないと考え、余裕を持って計画を立てることが重要である。また、博士課程の 3 年間は、あっという間に過ぎてしまったので、年次ごとの明確な目標を持ち、計画的に研究および学会発表を行っていくことが必要であると考え。

(国際学研究科 国際学研究専攻 第 8 期修了生)

(2017 年 3 月 6 日原稿受理)

博士録 43 第 22 号から今後の博士誕生を鑑み、新コーナーを設けました。第 43 回目には新入生にお願いしました。

- ① 氏名：**今野善伸** (*KONNO Soshinobu*)
- ② 出身大学院：宇都宮大学大学院
- ③ 専門：国際学研究 又は 文化人類学
- ④ 指導教官または所属研究室：柄木田 康之教授
- ⑤ 趣味：登山
- ⑥ 研究テーマ：葬送儀礼に見られる自然回帰への志向について
- ⑦ 自己紹介：国際通信を扱う会社で 3 5 年働き、退職してから宇都宮大学国際学部に入學した。生まれ育った町は宮城県仙台市に隣接する名取市で、実家がある区域は冬になるとセリの出荷で大忙しです。市内には閑上漁港があり、近くには仙台空港がある。閑上町は 2 0 0 9 年の東日本大震災の津波では大打撃を受け、死亡・行方不明者は 7 0 0 人を越えた。実家の直ぐそばに共同墓地がある。中学・高校時代は自転車通学だったから毎日墓地の脇を通る。時には棺桶の土葬も見た。そんなことで墓地を見て歩くことに興味をもったのだろう。最近は時代を反映して、「心」「平和」「絆」とかの先祖代々の墓を否定したお墓の個人化・個性化の特徴が見られる。葬送儀礼研究のきっかけは、登山の仲間をケルンに散骨したこと、ヨットの仲間の遺骨を葉山沖に撒いたのが始まりである。根底には実家のそばに墓地があつて、色々な事象を子供なりに受け止めていたのではないだろうかと思っている。

(国際学研究科 国際文化研究専攻 第 17 期修了生)

(2017 年 5 月 13 日原稿受理)

- ① 氏名：**鈴木大史** (*SUZUKI Daishi*)
- ② 出身大学院：宇都宮大学大学院 国際学研究科 博士前期課程 国際社会研究専攻
- ③ 専門：国際学研究 (博士後期課程)、ラテンアメリカ地域主義・地域統合
- ④ 指導教官または所属研究室：磯谷玲先生、スエヨシ・アナ先生
- ⑤ 趣味：将棋、漫画
- ⑥ 研究テーマ：ラテンアメリカにおける地域主義及び地域統合の考察
- ⑦ 自己紹介：私は 2015 年に宇都宮大学大学院の博士前期課程に入學し、この度博士後期課程に進学しました。進学するに当たり多くの宇都宮大学関係者にお世話になりました。篤くお礼申し上げます。私は今日まで南米 (チリ、ボリビア) で五年間過ごし、南米の人々や社会に何かしらの貢献が出来ればと思い、(二度目の) 大学入學を決意し現在に至ります。研究テーマである「ラテンアメリカの地域主義・地域統合」の選択理由を私的観点から述べれば、国際社会における非国家的主体 (地域統合含む) に対する好奇心と、第二の故郷である南米への貢献を複合した結果となっています。浅学菲才さ故の不安は常に抱いておりますが、皆様のご厚意に報いるためにも努力精進する所存です。

(国際学研究科 国際社会研究専攻 第17期修了生)

(2017年5月12日原稿受理)

- ① 氏名：梁 鎮輝 (LIANG Zhenhui)
- ② 出身大学院：宇都宮大学大学院国際学研究科 博士前期課程 国際文化研究専攻
- ③ 専門：近代日本思想・文学、日中文化交流史
- ④ 指導教官または所属研究室：松金研究室
- ⑤ 趣味：読書、映画
- ⑥ 研究テーマ：近代日本における「中国」の包摂
- ⑦ 自己紹介：私はホラー映画が大好きです。東西の様々なジャンルのものを観てきました。「全米を震撼した」と宣伝されている欧米のホラー映画を観てもボンヤリとして怖がる要素が分からなかったりする一方、日本のを観ると無意識的にその中に自分が入り、「理解できる」怖さが自然と生まれる。この「共通」とした感情はなんだろうという問いを究明することは、私の研究動機でもあります。映画に限らず、古いものの伝統芸能から、新しいもののアニメまで、日中文化における現代人に明確に認識されていないけど、確実につながっている何かがあります。私の研究テーマ、近代日本における「中国」の包摂は、その「何か」を一側面から理解しようとするものです。

(国際学研究科 国際文化研究専攻 第17期修了生)

(2017年5月14日原稿受理)

知究人 31 第9号から特に、国際学部出身者で他大学院へ進学された方に、寄稿をお願いしたコーナー(ちきゅうびと)を設けました。

海外だより 24 第27号から国際学研究科、国際学部出身の海外在住者からの寄稿をお願いしたコーナーを設けました。

海外留学今昔 19 第35号から国際学部出身者および在学者を中心とした海外留学体験の寄稿をお願いしたコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**海外留学経験者**および**海外留学中の在学者の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

学生サロン 12 知求会ニュース第41号より現役学部生によるコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**現役学部生の積極的な情報提供**を事務局にお寄せ下さい。

キャリア指南 12 現役学部生に向けた企画として、宇都宮大学全学部から国際機関をはじめ、NGO・NPO や企業などで活躍する先輩方に執筆していただくコーナーを設けました。自薦・他薦を問いませんので、**キャリア指南にふさわしい卒業生の積極的な情報提供**を事

務局にお寄せ下さい。

フォーラム 2017年の水無月を迎えて、皆様忙しいことと思います。(原稿集めに苦労しています。)

EU支部だより

第38号からイタリア在住の**松原真実子**さんによる知求会EU支部だより「Newsreel World」を発行してきました。今回の22号の内容は、1 イタリア これが警察車両!? ウラカンの警察仕様がデビュー 2 EU支部だより ー世界のパトカーーです。配信方法は、画像が掲載されているために別便で配信します。ファイル容量が大きいことで、ニュースレターが受信できない場合にはその状況をお知らせください。

編集者のひとりごと

- 昨年暮れぐらいから、現在使用しているパソコンの調子が悪くなってきました。ハードディスクのCドライブ450GBが満杯になり、動作が悪いのです。OSはWindows7で、長らくWindowsXPに慣れたものとしてはなはだ使い勝手に苦慮されてきました。4月下旬に思い切って新しいパソコンを購入し、何とか「知求会ニュース」編集と配信に支障をきたさない様になりました。しかしながら、OSはWindows10となり、しばし慣れるのに四苦八苦しているところです。今後も、ハードの故障のたびにソフトの慣れに時間を費やすことを考えると気が滅入ります。皆様はどうしているのでしょうか。
- 私事ですが、毎年5月に鹿沼市が開催している「鹿沼さつきマラソン大会」に出場しました。本年は連続出場20回目でした。最初の3年は10kmの部でしたが、4年目からハーフに出場し、17回目の完走でした。年1回の健康バロメータとなることを目的に参加し続けています。ただ、この2~3年は、大会の直前の強化練習で場を繕っていますが、時間が足りないことと、精神面の衰えが顕著です。来年は制限時間2時間半を維持できるか戦々恐々の状態です。健康維持には運動・睡眠・食事のバランスが重要なのはよく理解しているつもりですが、なかなか行動についてこないのが現状でしょうか。
- 5月1日配信予定だった「知求会ニュース第62号」が大幅に遅れましたことを改めてお詫びいたします。編集者の知力・体力などが至らずご迷惑をお掛けしました。

編集後記：2010年4月26日から **知求会ニュースのバックナンバー**は **国際学部同窓会 HP** (<http://www.afis.jp>) で見られるようになっていきます。

同窓会会員の皆様へのお願い：**住所、勤務先および携帯電話番号、メールアドレスの変更の際は事務局へメールして下さい。** chikyukai@freeml.com